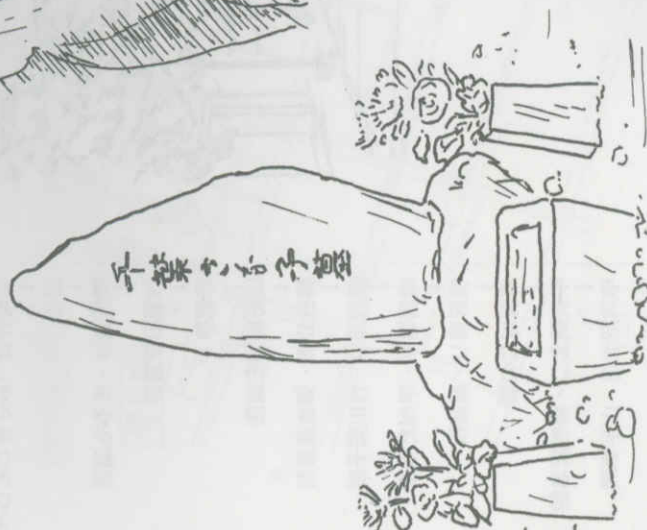


甲府市朝日町界限 編

新婚時代の太宰治と、
坂本龍馬のもう一人の妻
千葉佐那ゆかりの地をめぐる



ぬりえにチャレンジ!

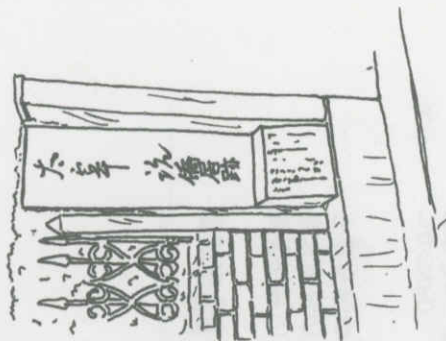
まちミュー友の会

特定非営利活動法人つなぐ (つなぐNPO)
つなぐほんぽん堂
〒400-0031
山梨県甲府市丸の内1-1-11-1207
Tel&Fax 055-228-8633
<http://www2a.biglobe.ne.jp/~yamaku/>

200円 (税込)

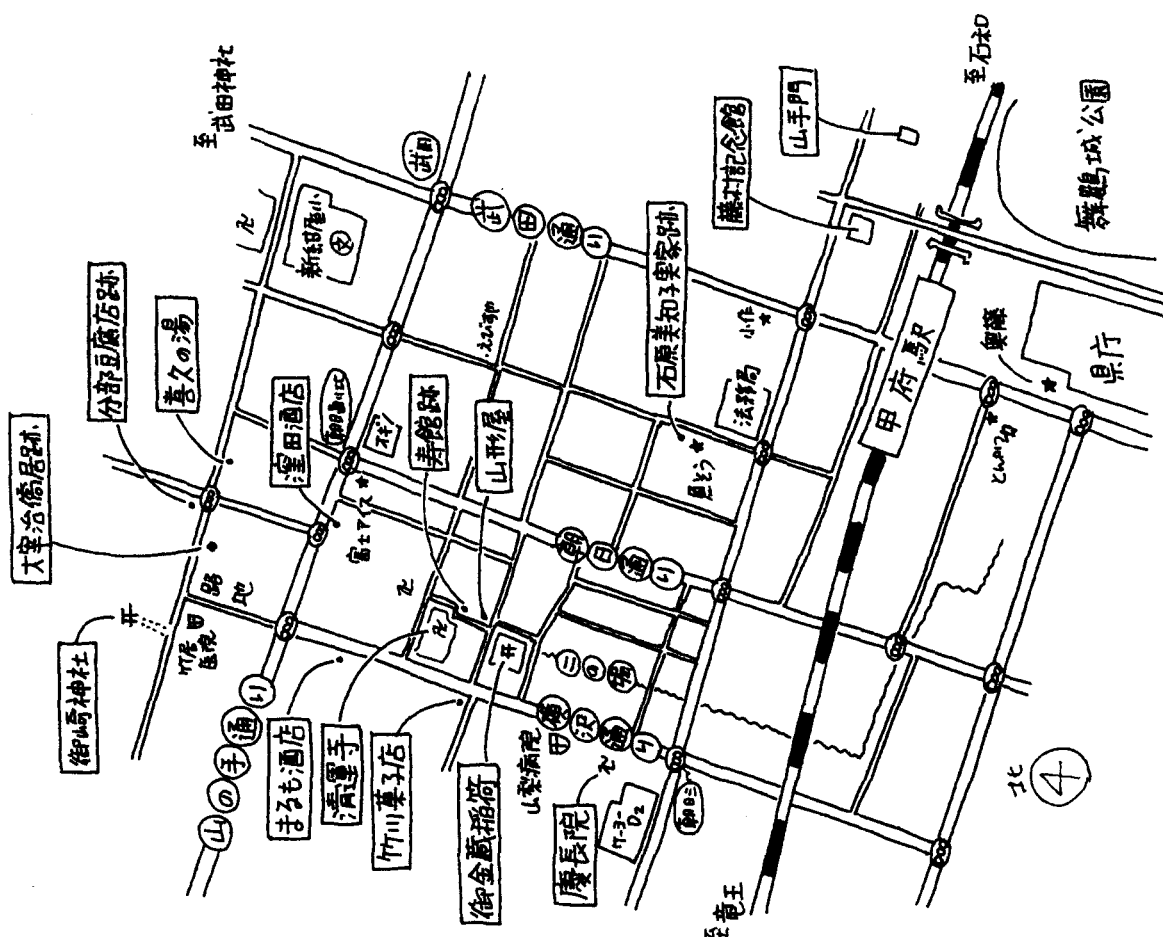
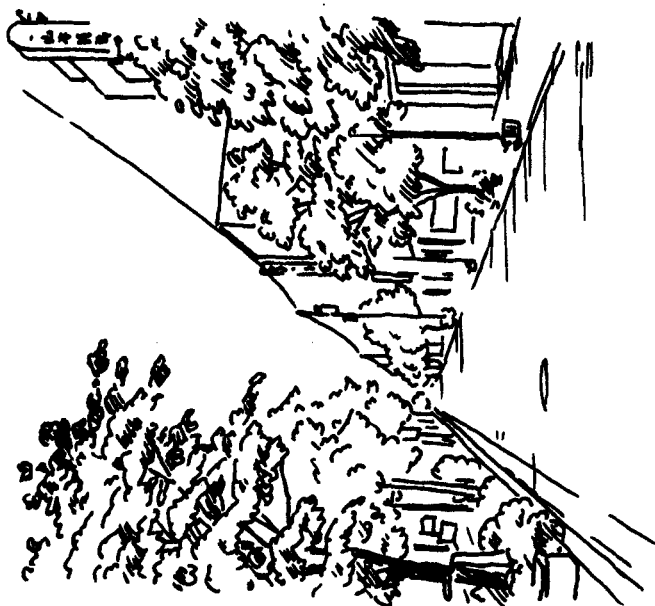
甲府市朝日町界限 編

新婚時代の太宰治と、坂本龍馬のもう一人の妻千葉佐那ゆかりの地をめぐる



行程案

甲府駅北口・クリスタル・アース
↓
石原美知子の実家跡
↓
朝日町商店街（朝日通り）
↓
塩田酒店
↓
藤久の湯（きのゆ）
↓
椿子戸の家
↓
分部（わけべ）豆腐屋跡
↓
太宰治銅像跡
↓
御崎神社（みさきじんじや）
↓
路地
↓
椿沢通り・まるも酒店
↓
妙清山清蓮寺
↓
姥鯨跡
↓
山形麗琴三枝店
↓
朝日公園・御金蔵稲荷
↓
椿沢通り・竹川菓子店
↓
椿沢通り・甲州だるま
↓
椿沢通り・蔵長院
↓
甲府城二の堀
↓
甲府駅北口・蔵村記念館
↓
甲府駅北口・山手御門

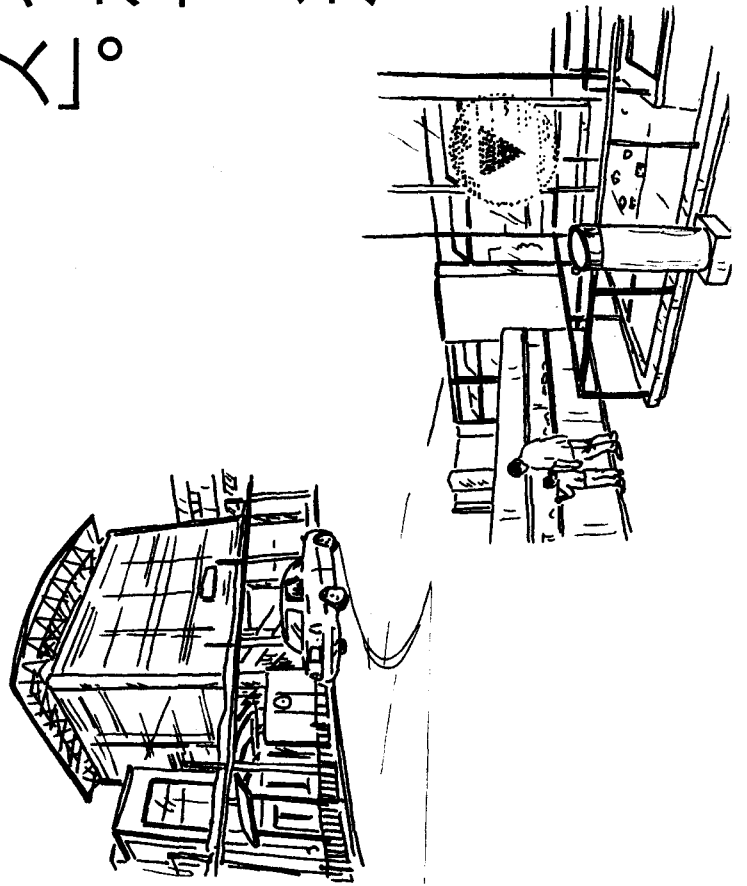


甲府駅北口・クリスタル・アース

甲府駅北口の待ち合わせスポット 「クリスタル・アース」。

甲府駅北口自由通路の構内にある広場には、宝石のまちを象徴する水晶モニュメント「クリスタル・アース」があります。これは、山梨県発祥と伝えられる研磨方法である、三十二面体研磨が施された直径一・五センチの水晶、約七千個で形つくられた球形のモニュメント。中には、ブドウ模様が刻まれているものもあります。

クリスタル・アースは、十五分おきに音楽とともに輝きます。また、センサーに専用の印傳ストロップをかざすと、バリエーション豊かな光と音が楽しめます。ストロップは、エグツインと上原勇七印傳屋本店で販売しています。



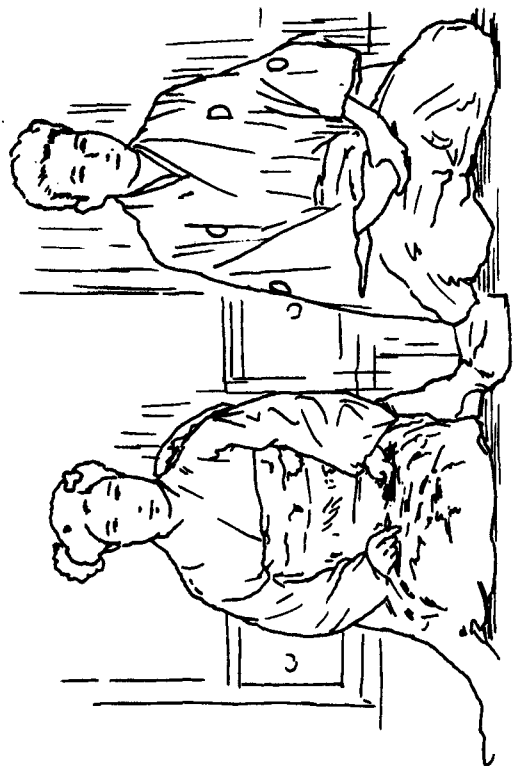
04

太宰治

小説家・太宰治は、甲府で八ヶ月間の 新婚時代を過ごし、

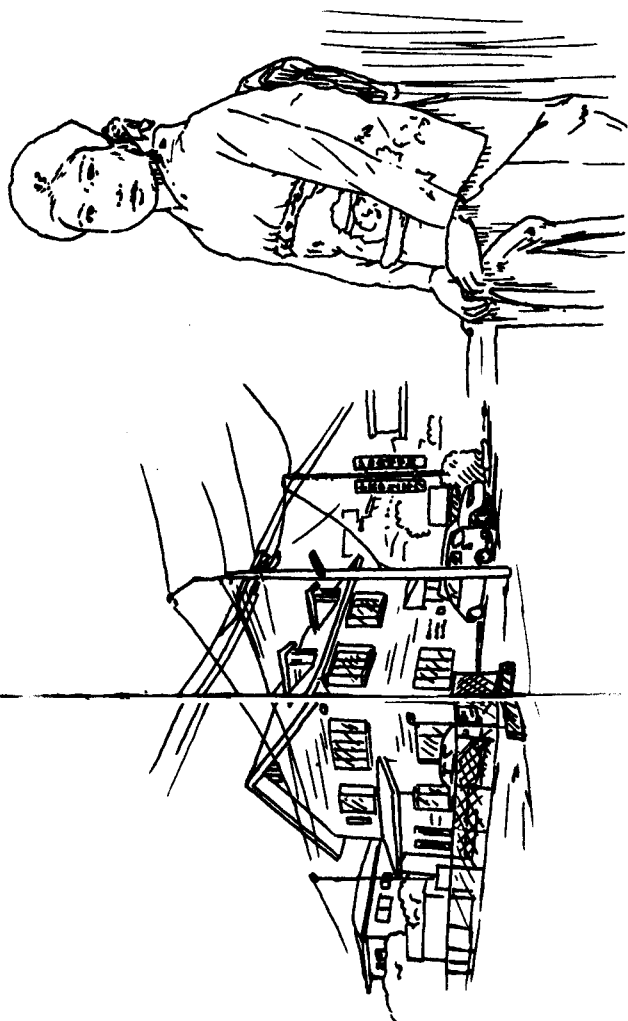
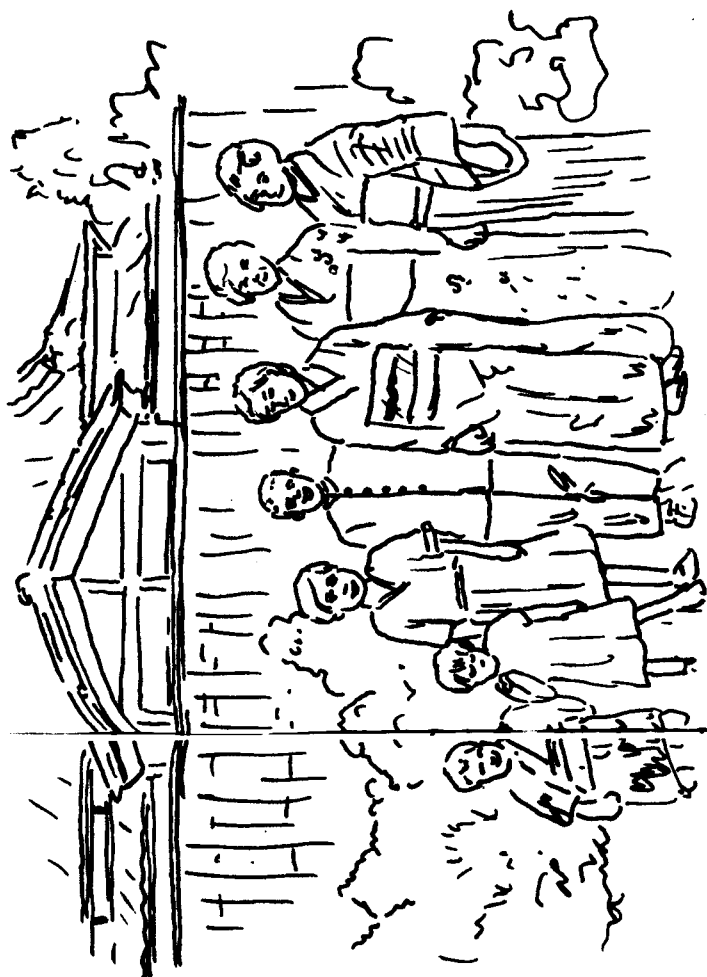
太宰治は、明治四十二（一九〇九）年六月十九日、青森県金木村の大地主の家に生まれ、十代半ばから執筆活動を始めました。やがて東京帝国大学に進学。そのころ、新進小説家として活躍しながらも薬物中毒や心中未遂事件を繰り返していました。

太宰を心配した井伏鱒二の勧めで、昭和十三（一九三八）年、山梨県の御坂峠にある天下茶屋に滞在することになった。太宰の『富嶽百景』には、「昭和十三年初秋、思ひをあらたにする覚悟」とつつこっています。そして井伏を通して石原家の長女・美知子と見合いをして、翌昭和十四（一九三九）年一月に結婚。甲府で新しい人生をスタートさせました。



05

太宰治は、美知子の実家に通い、酒と手料理を楽しんでいた。



石原家は、水門町(現・朝日町一丁目)にありました。現在は、広い駐車場になっており、その一角に小沢クリニックスが建っています。当時は、駐車場の南の道路まで石原家の私道だったといえます。

太宰の妻・津島美知子がつづった『回想の太宰治』には、結婚前の様子を「太宰はほとんど毎日、私の実家に来て手料理を肴(さかな)にお饂飩を二本ほどあけて、きげんで抱負を語り、郷里の人々のことを語り…」とあります。

結婚後、太宰治は御崎町(現・美咲町)に新居を構え、約八ヶ月の新婚生活を送りま

した。昭和十四(一九三九)年九月、太宰夫婦は、甲府を引き払い、終の棲家となる東京府北多摩郡三鷹村(現・東京都三鷹市)に移転しました。

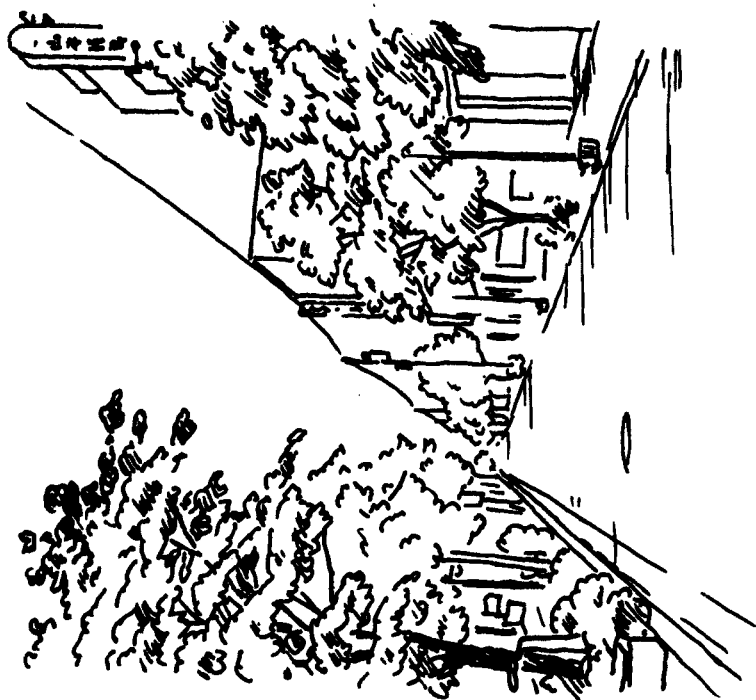
昭和二十(一九四五)年、東京で空襲にあった太宰は、家族とともに石原家に疎開(そかい)した。そのときの様子や当時の甲府の風景が小説『薄明』に描かれています。石原家は、甲府空襲で焼けてしまい、いまはその姿を見ることはできません。しかし、石原家の実家跡近くに当時を偲(おも)わせる昭和の面影を残した木造建築が残っています。

朝日町商店街（朝日通り）

朝日町商店街には、 個性的なお店が並ぶ。

甲府の北部には、昭和二十（一九四五）年の終戦まで、「第四十九連隊」という陸軍歩兵部隊が存在しました。朝日町通りは、その兵隊を相手に日用品などを売って生きてきたまちです。昭和初期、通りの中ほどに「城北百貨市場」という市場ができました。コンクリートの平屋建ての建物の中には、二十軒以上の店が入り、賑（にぎ）わっていたそうです。

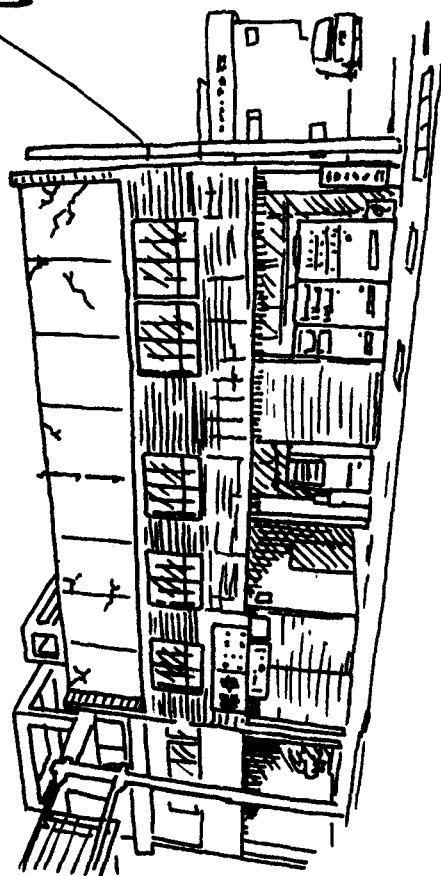
いまでは、当時からの店は数軒になってしまいましたが、個性的な店が並んでいます。季節になると行列ができる和菓子屋さんや地元で愛される八百屋さん、また定食屋さんもあります。



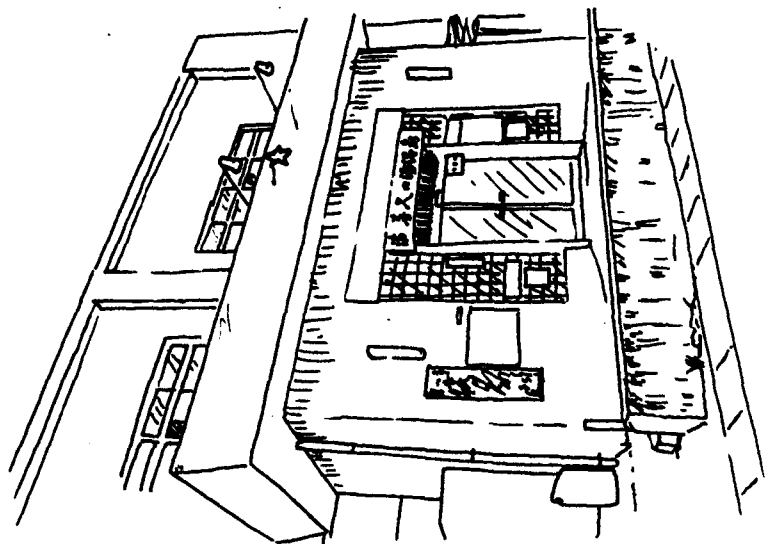
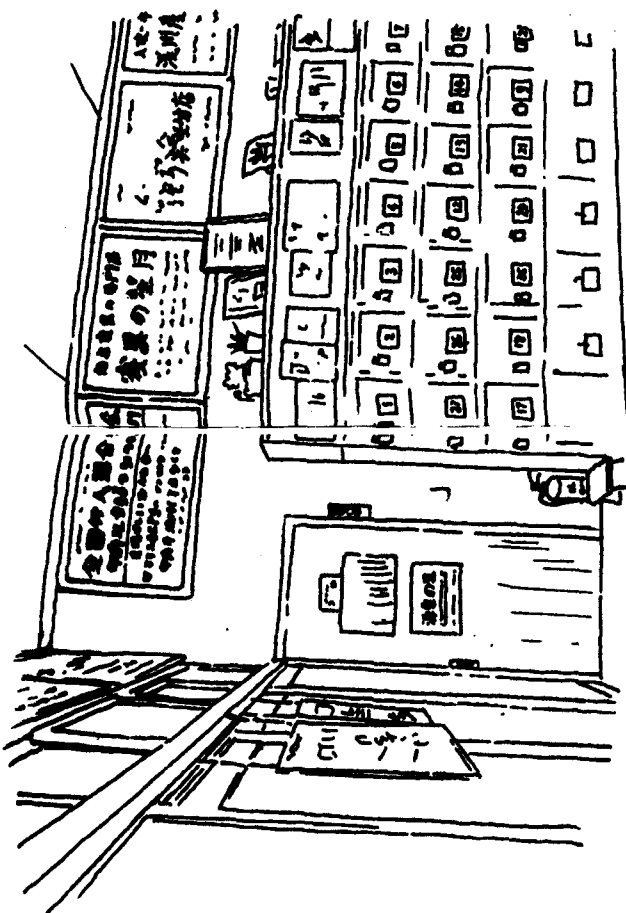
窪田酒店

太宰治の行末つけの酒屋は、 窪田酒店だった。

太宰は、朝日五丁目の信号機のところにあった「窪田酒店」に通っていました。この店には、夫婦で訪れていたこともあるそうです。酒は、一円五十銭の地酒を主に注文していました。当時、太宰は、長兄から月額九十円の仕送りがありました。そのうち毎月、酒代に二十円は当てていたといいます。「いつもお銀子三本が適量だと言ってキリよく引き上げていたが、適量ところが火をつけたようなもので、このあと諸所を飲みまわって異郷での孤独をまきわらせていたらしい」と美知子はつづいています。



太宰治は、毎日のように
「喜久の湯」にでかけて
汗を流していた。



昭和九(一九三四)年創業の天然温泉、喜久の湯。今でも地元の人々の憩(いこ)いの場として親しまれています。建物は、改装されていますが、内装は、むかしながらの「おふろ屋さん」です。

番台をはじめ、脱衣所には、木の鍵の口ツカーや大きな体重計、大きな鏡があります。女湯の鏡の近くには、むかし、赤ちゃんの着替えに使っていた、台も残っています。タイル張りの風呂場も創業当時のまま。ひ

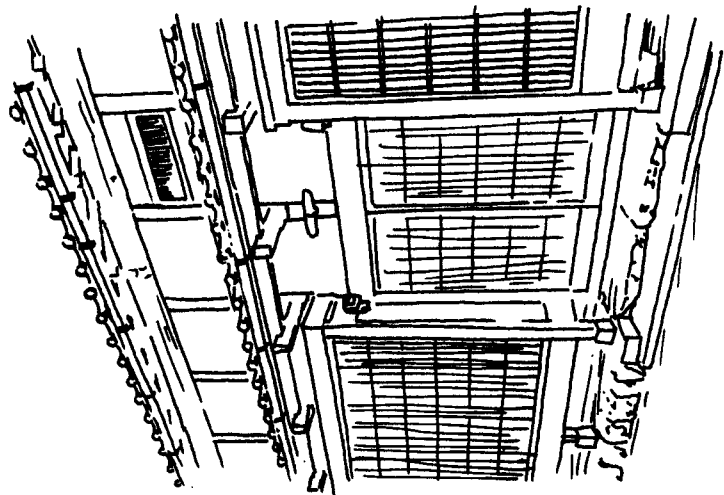
ょうたんのような形をした浴槽も見どころの一つです。

家に風呂がなかった太宰は、毎日ここに通っていました。美知子は、「毎日三時からまだ机に向かい、それから近くの喜久の湯に行く。その間に支度しておいて夕方から飲み始め、夜九時頃までに六、七合飲んで...ふつ倒れて寝てしまつ...」と当時の太宰の生活を書き残しています。

中島家の格子戸は、京都の下町を 思い起こさせる。

喜久の湯の斜め向かいには、昭和の木造建築があります。南側が美しい格子戸になっているのは、一般的な都市部の建築を意味しています。

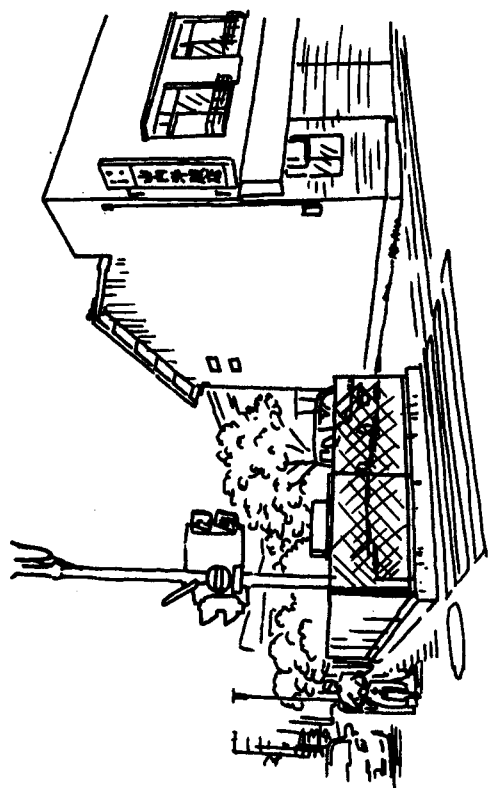
中島家の場合、手前が公道であるため、「公私を区切るもの」として格子戸が使われています。格子戸にすることにより、光を通し、換気もできます。しかも、外からは中の様子が見えません。また、縁が上がっているのは、風の通りをよくするためです。屋根の瓦は二段組になっていてこれは雨水が直接格子戸にかからないようになっています。日本の伝統文化と建築技術を感じる建物ですね。



太宰治の酒の肴^(さかな)は、 もつばい湯豆腐だった。

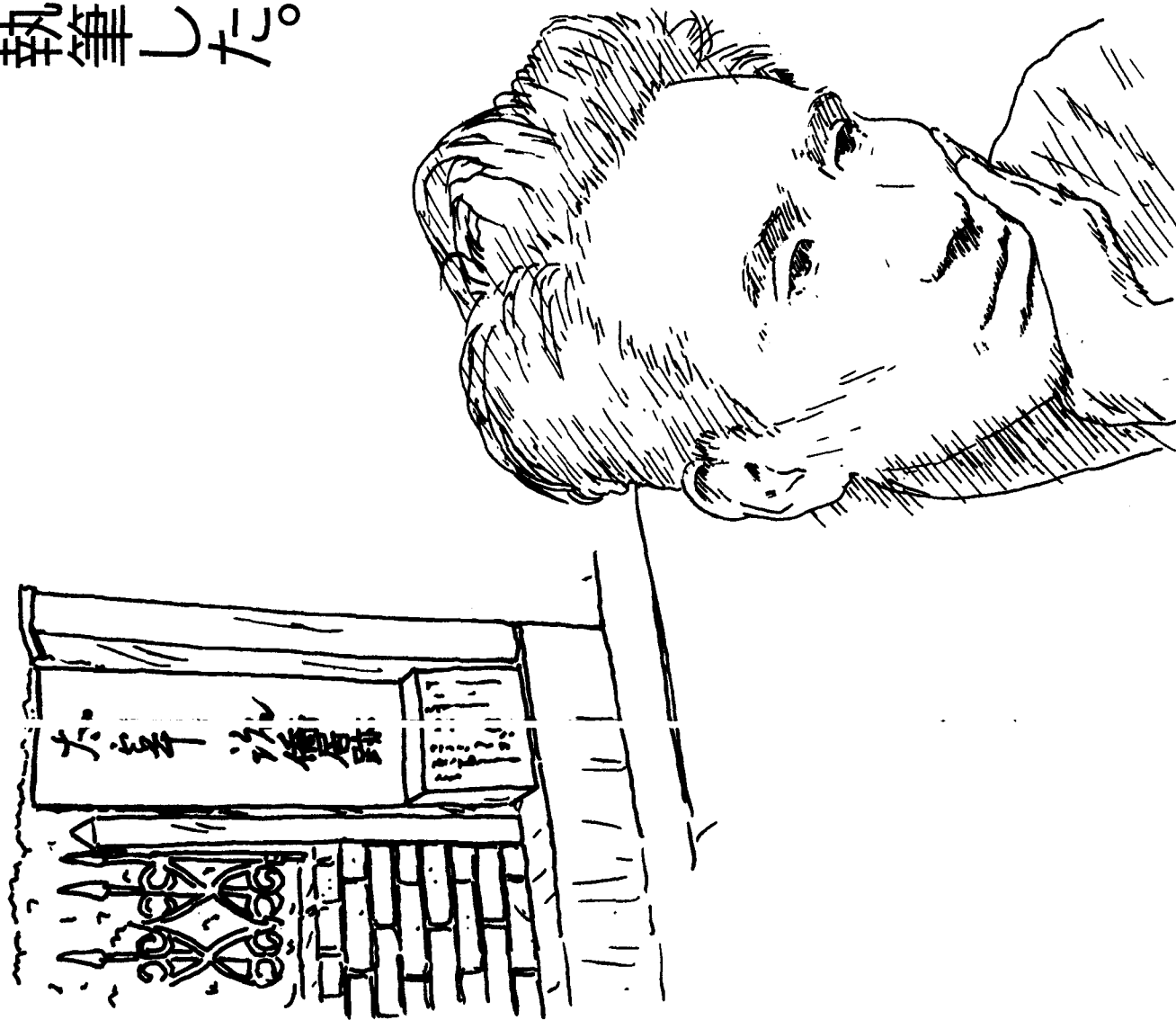
喜久の湯を御崎神社方面に向かつて歩いた右角に分部豆腐屋がありました。美知子は、豆腐好きだった太宰のために豆腐を何丁も買ったといいます。太宰いわく「豆腐は酒の毒を消す。味噌汁は煙草の毒を消す」ということですが、太宰は歯が悪かったと、豆腐なら何丁食べてもお金がかからないところに豆腐を好む本当の理由があったようです。

太宰は、昭和十三(一九三八)年の「国民新聞」に「九月十月十一月」と題した随筆の中で、「ふと豆腐屋の硝子戸に写る私の姿もなんと、維新の志士のように見えた」と



書いています。この近辺を散歩していたのがわかります。

太宰治は、御崎町(現・美咲町)に新居を構え、『黄金風景』や『続、富嶽百景』などを執筆した。



分都豆腐屋跡から西へ進んだ左側には、「太宰治舊居跡(ださいおさむたきよあと)」と刻まれた石碑が建っています。実際は、石碑の右側奥に新居がありました。美知子の回想によると、「引越す前、酒屋、煙草屋、豆腐屋、この三つの、彼に不可欠の店が近くに揃っていてお誂(あつら)え向きだと、私の実家の人たちにひやかされた」とあります。

昭和十四(一九三九)年一月、太宰と美知子は、御崎町(現・美咲町)六十五番地の借家に移り住みました。二人は、ここで約八

ヶ月の新婚生活を送っています。太宰はこの間に、『黄金風景』や『女生徒』、『続、富嶽百景』などを執筆しました。

『畜犬談』では、「甲府のまちはづれに八畳、四畳、一畳といふ草庵を借り、こっそり隠れるやうに住み込み、下手な小説あくせく書きすすめてゐたのであるが、この甲府のまちどろく行つても犬がある」と新居にいたころの様子を書いています。これも甲府空襲で焼けてしまい、現在は残っていません。

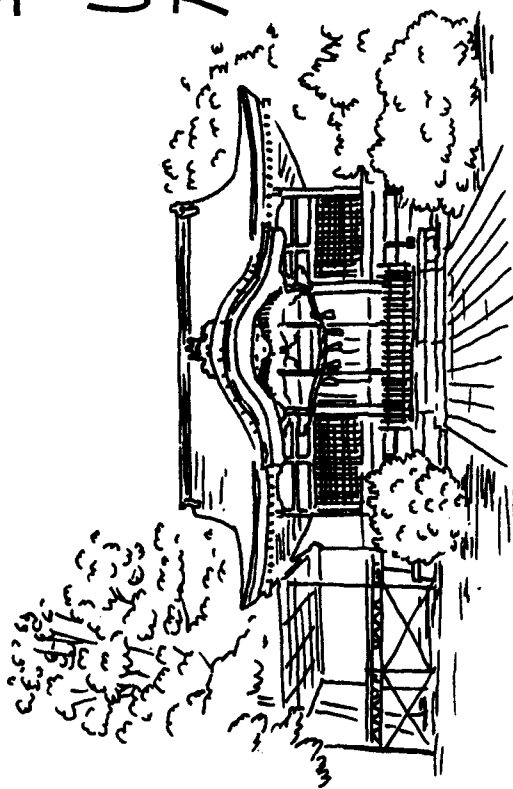
御崎神社(みさきじんじゃ)

御崎神社は、武田家の館や甲府城の守護神としてまつられていた。

御崎神社は、武田信虎がいた石和の館の鎮守としてまつられていました。永正十六(一五一九)年、信虎は石和から甲府の躰岡ヶ崎(つづしがたき)に館を移します。その際、御崎神社は稲荷曲輪(いなりくるわ)に遷座(せんざ)。(文禄三(一五九四)年、甲府城築城のとき、城の北西の守護神として現在地に移されました。

武田氏滅亡後、神社は甲府城の守護神となり、それぞれ、移転したまちの地名の由来にもなっています。

ちなみに太宰は、執筆の合間に御崎町(現・美咲町)界隈をよく散歩していたようです。



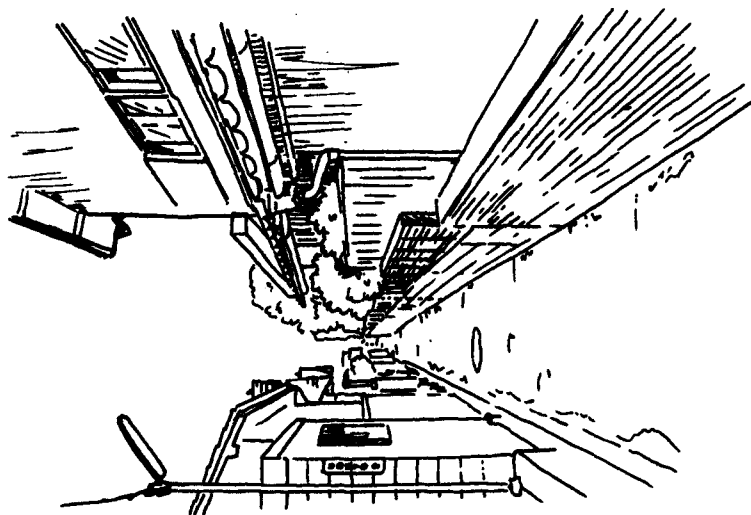
路地

「昭和初期の建物」が残る路地がある。

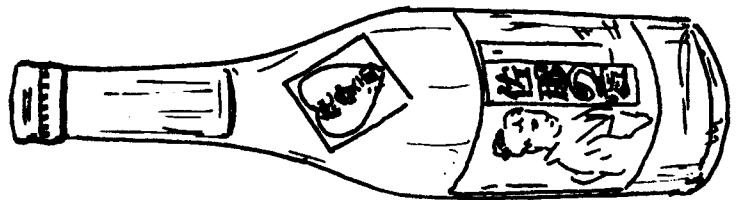
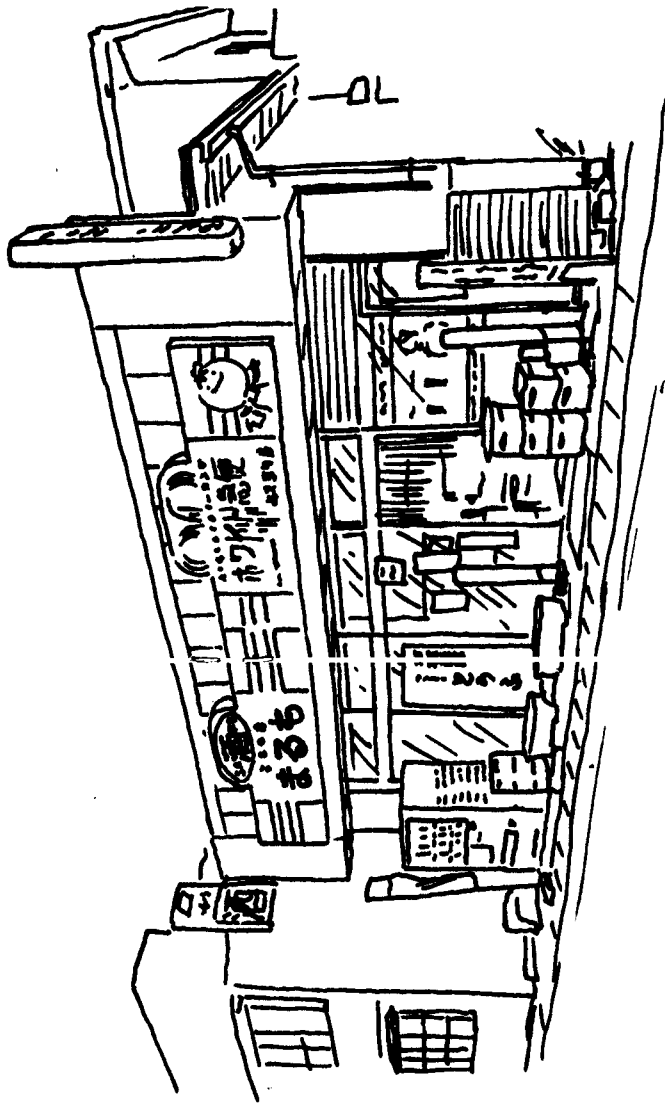
御崎神社を南に下ると、山の手通りにつながる細い路地があります。この辺りは、戦災でも焼けなかったため、いまも昭和初期の建物がそのまま残っています。この通りには、写真家・内田宏さんが住んでいました。

内田さんは、昭和二十二(一九四七)年に県庁に入庁。農業普及の広報担当になったのをきっかけに、農業を中心とした県内の生活写真を撮りつづけてきました。

写真には、昭和二十年から三十年代の農村風景や外で元気に遊ぶ子どもたちの様子がいまもよく写し出されています。



まるも酒店には、
一口飲むと胸がキコへとする
「純愛酒」がある。



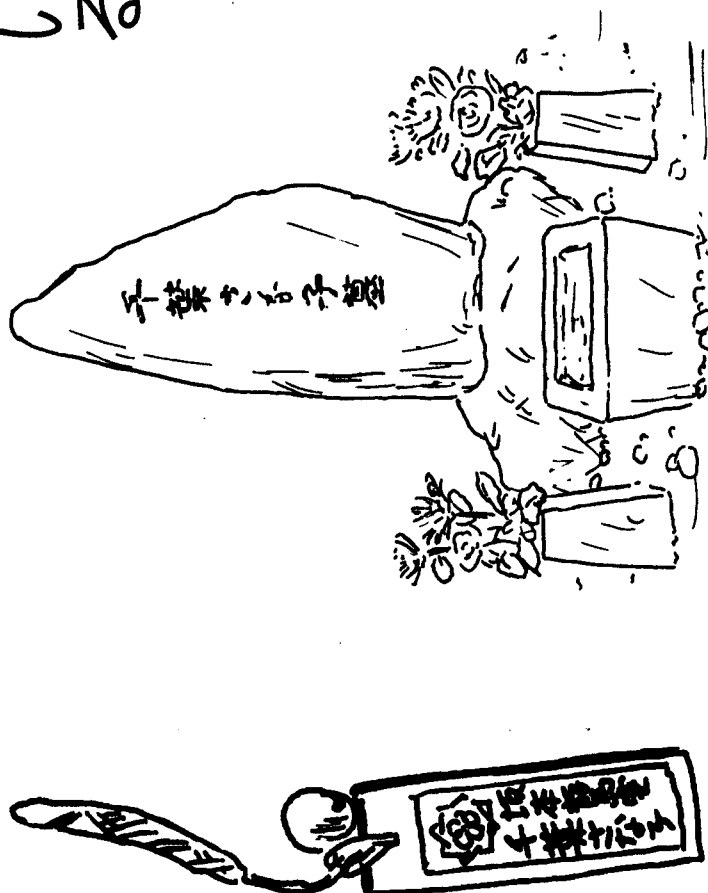
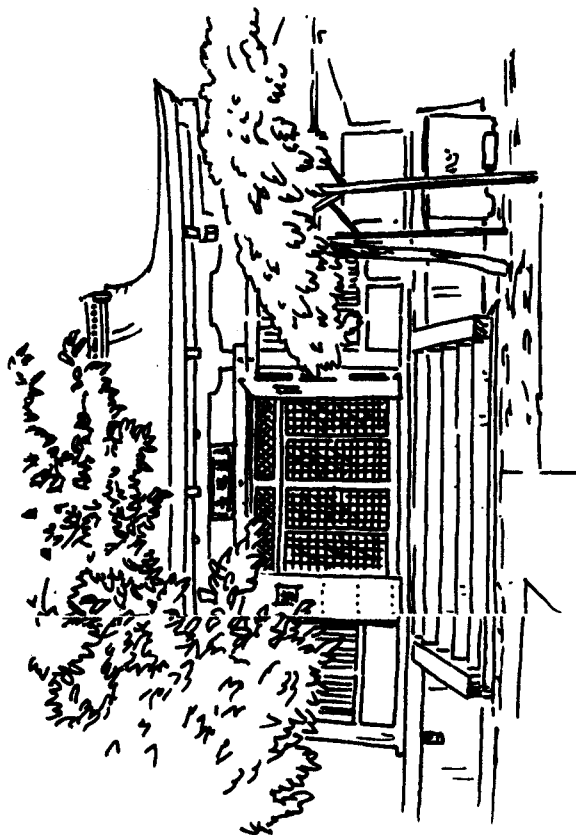
NHK・大河ドラマ「龍馬伝」に登場した
北辰一刀流の千葉定吉の娘・千葉佐那は、
まるも酒店の東にある清運寺に眠ってい
ます。

嘉永六（一八五三）年、江戸に遊学した坂
本龍馬は、千葉道場へ入門。ここで佐那と
出会いました。そのころ、龍馬は土佐藩を脱
藩し、勝海舟に弟子入りします。この間、龍
馬と佐那は、お互いに好意を寄せていたそ
うです。やがて龍馬は幕末期の荒波に翻弄

（ほんろつ）され、運命が二人を引き裂きま
した。龍馬の死後、佐那は龍馬のことを忘
れられず一生独身を貫きました。

まるも酒店では、龍馬への愛を一途に貫
いた佐那にちなんだお酒「佐那の愛」を販
売しています。「佐那の愛」は、山梨県産米百
パーセントの純米酒。すっきりとした辛口
の味です。

千葉佐那は、 坂本龍馬の妻として 清運寺に眠っている。



清運寺には、坂本龍馬の許婚(いいなずけ)だった千葉佐那(さな子、佐那子)の墓があります。佐那と親交が深かった自由民権運動の闘士・小田切謙明と妻・豊次(とよし)が、縁者のない佐那の身の上を案じて小田切家の墓所内に分骨したと伝えられています。

墓石の正面には、「千葉さな子墓」、横面には「小田切豊次建立」と刻まれています。裏面には、「明治廿(二十)九年十月十五日 逝 坂本龍馬室」と刻まれています。室とは、正室や側室の「室」で、佐那は龍馬の妻として眠っています。

清運寺には、「千葉さな子」のお守りがあります。お守りは、携帯ストリップ型で、櫛

(くし)などに使われているツゲを使用。ツゲは古来、魔よけになる霊木だといわれています。

また、太宰が美知子と結婚する前に一時住んでいた寿館の横道は、清運寺の参道でした。現在はアスファルトになりましたが、参道の敷石の一部が境内に残っています。太宰は散歩がてら、清運寺くも訪れていたことでしょう。

※墓所は観光スポットではありません。静かにお参りしましょう。

美知子との婚約中、太宰治は「寿館」といつ下宿に住んでいた。

昭和十四(一九三九)年、美知子と婚約した太宰は、結婚が決まると、御坂峠の天下茶屋から甲府の寿館へ移ります。寿館は、清運寺参道の左側あたりにありました。当時、山梨高等工業(現山梨大学)の学生や甲府中学(現甲府一高)の教師が下宿していたそうです。

「寿館は下宿屋らしい構えで、広い板敷の玄関の正面に大きい掛時計、その下が帳場、左手の階段を上り左奥の南向きの六畳が、太宰の借りた部屋である」と美知子は回想しています。

寿館の近くには、『女生徒』の題材になった製糸工場もありましたが、甲府空襲で焼失してしまいました。



山形屋琴三絃店

粋な看板と昭和なただすまいを残した、山形屋琴三絃店(やまがたやこしせんけんしん)。

山形屋琴三絃店は、三味線や琴などの和楽器の専門店です。看板は、三味線の胴のかたちをしており、「粋」を感じさせます。百五十年以上つづくお店で、山梨では一番古い和楽器屋です。

山形屋のご主人・日原さんは、ボランティアで各地をまわり、和楽器の普及に力を注いできました。平成十四(二〇〇二)年度から小中学校の音楽の授業に和楽器が取り入れられ、よつやく日原さんの活動が広く受け入れられるようになりました。

ちなみに、三味線の皮は、いまは合成ですが、もともとは猫や犬の皮が使われていました。



御金蔵稲荷は、 盗難除^(とつなんよ)けの「利益」^(いやく)がある。



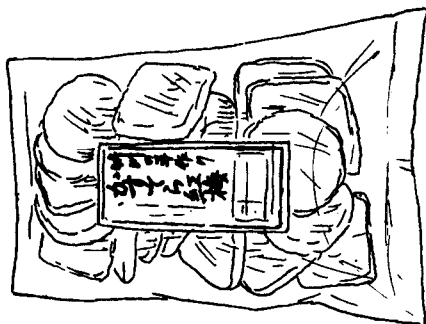
享保十九(一七三四)年十二月二十四日の夜、甲府城の大手門の渡り櫓(やぐら)の御金蔵が破られました。甲州金など、約一四〇〇両(現在の約一億円以上)が盗まれた事件です。九年後、たびたび両替に来るのを不審に思った両替商からの情報で犯人が捕まりました。盗んだのは、高畑村の次郎兵衛。お城に奉公していたときに金のありがを知り、盗みに入ったのでした。この事件で、役人たちの怠慢も発覚。勤務中でも

酒を飲んで、寝ていたという調書も残っています。

事件後、頑丈な御金蔵がつくられました。が、廃城のあと、甲府中学の体育倉庫として使われたりしていました。昭和の初め、盗難除けの「利益」があるとされ、朝日町が払い下げ、現在地に移設。そして稲荷を勧請(かんじよう)して御金蔵稲荷としました。

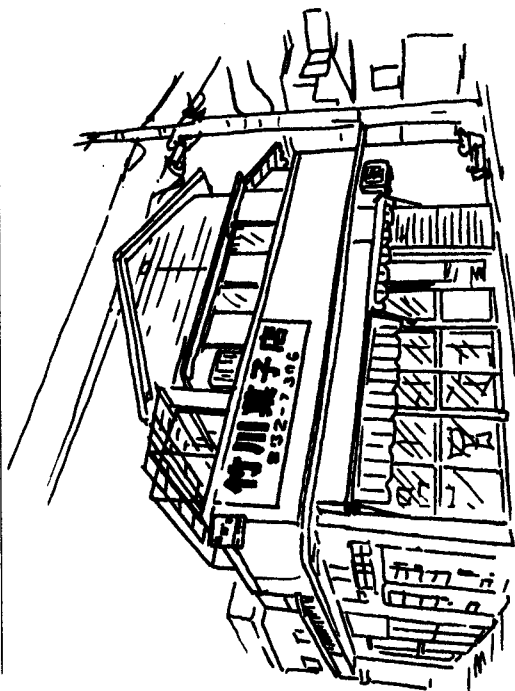
横浜通り・竹川菓子店

なつかしい味にはっぴい、 竹川菓子店の紅梅焼き。



昭和の初めからこの地で紅梅焼きをつくっている竹川菓子店。紅梅焼きとは、そのかたちが梅の花に似ていることから名づけられたといいます。卵、小麦粉、砂糖蜜など天然素材でつくられており、クッキーよりやわらかく、スポンジケーキより固いお菓子です。

独特のやわらかさを出すために、何度もこねて生地をつくっています。生地からこねて型を抜く作業は、三時間から四時間かかるとか。一日につくれる量は、五十袋ほど。一度食べたらくせになるなつかしい味を一度、賞味あれ。

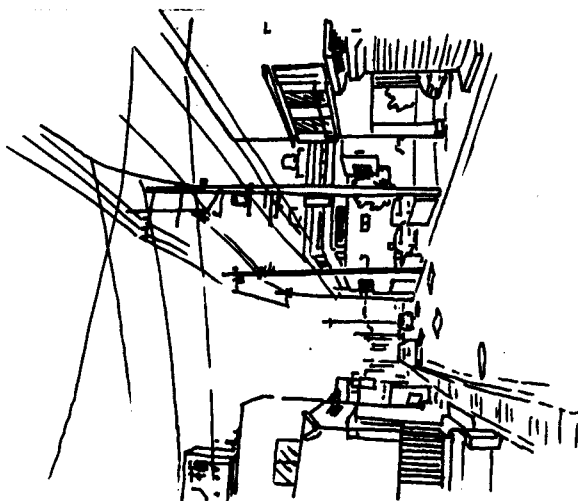


横浜通り・甲州だるま

横浜通りには、「甲州だるま」を つくる職人が大勢いた。

甲州だるまは、甲府市で行われる大神宮節分祭と湯村厄除け地蔵祭の縁日に売られていました。第二次世界大戦まで、横浜通りには、甲州だるまをつくる職人がたくさんいました。そのため、甲州だるまは、別名「横浜だるま」とも呼ばれていたそうです。

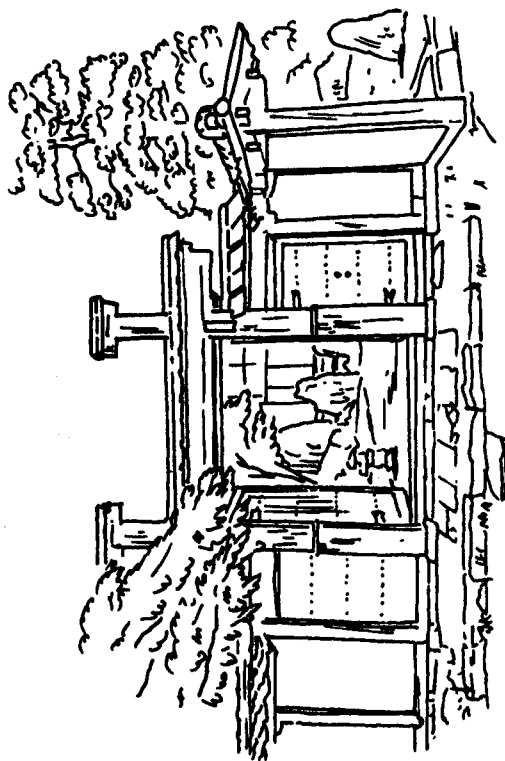
旧横浜町では、大小の木型に和紙を糊(のり)で幾重にも張り、寒風にさらす姿が見られました。「横浜だるま」は、顔の彫りが深く、目が横長の楕円形をしていて眉毛と顔ひげが鶴亀の格好をしているのが特徴です。どこか威厳があり、武田信玄を模したものだともいわれています。



「慶長院」には、甲府城から 移築された山門がある。

白壁が美しい参道を進むと、慶長院の山門が見えます。甲府城の山手御門から移築された黒門です。少し小さいように思われるかもしれませんが、当時のお城は、手前にこのような小さい門がありました。

門をくぐると、三方を高い石垣で囲んだ空き地があり、その石垣の脇にある石段を上がったところに、大きな門がつくられていました。小さな門を破ってきた敵兵が空き地になだれ込んだところを、石垣の上から一斉射撃をして壊滅させるというわけです。



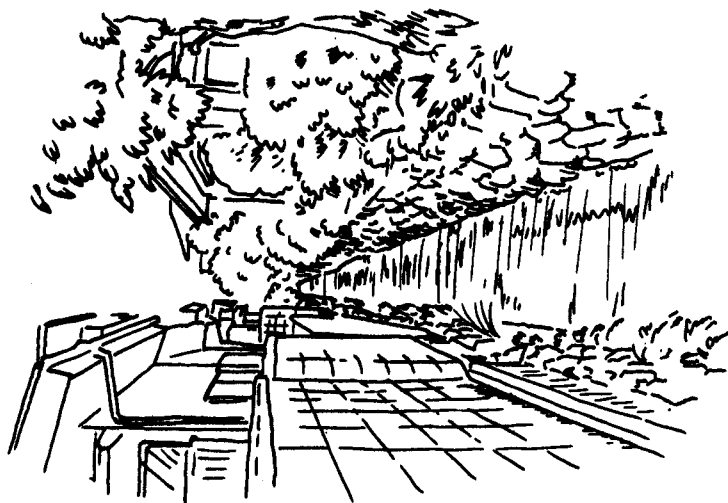
甲府駅北口の甲府市歴史公園に山手御門が復元されていますので、当時の様子をご覧ください。

甲府城二の堀

甲府城の二の堀を見ながら、 朝日町通りく。

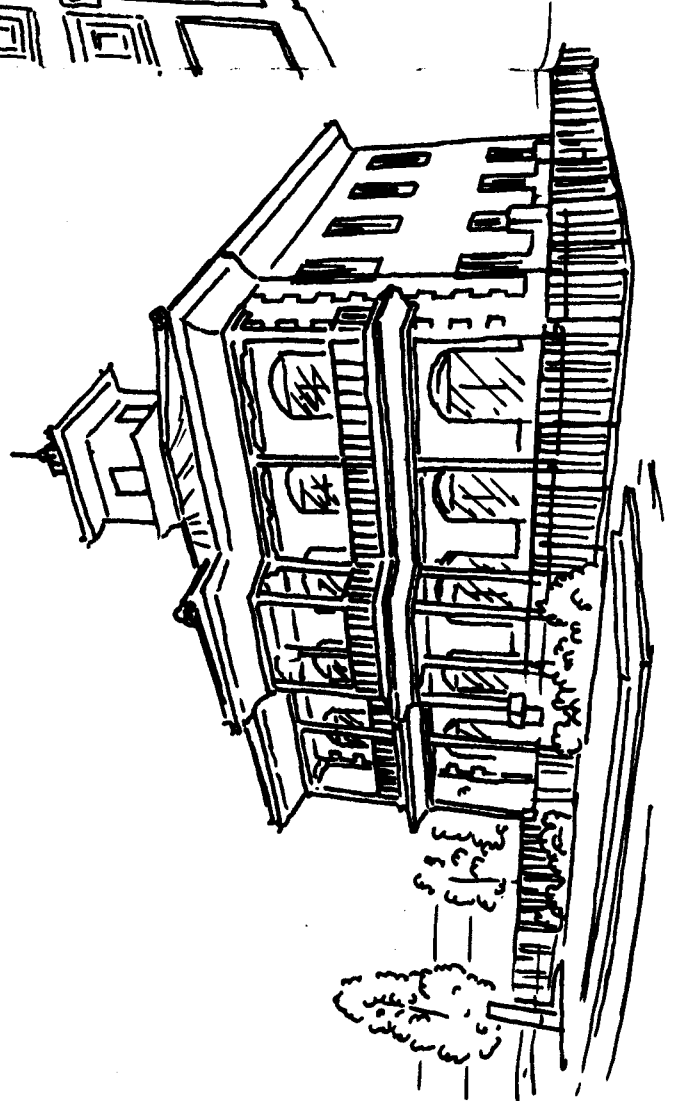
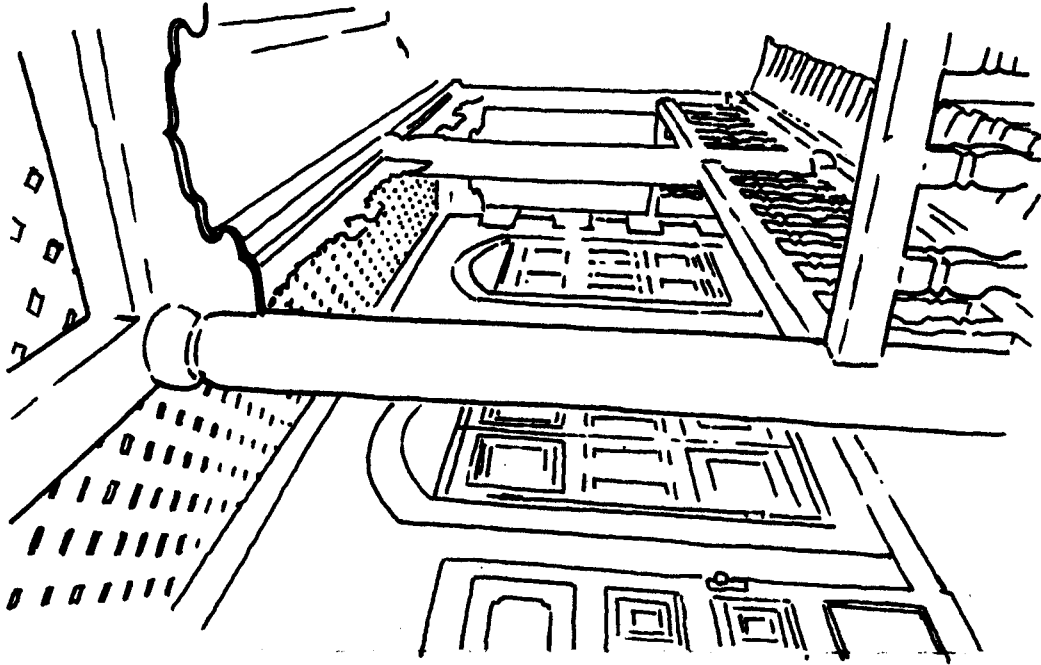
慶長院の斜め向かいの路地を進むと、甲府城の二の堀があります。現在、堀のほとんどが埋め立てられ、道路に変わっていますが、ここでは、堀の面影を見る事ができます。

甲府城には、内堀、二の堀、三の堀がありました。三つの堀で、住む場所が分けられており、城を中心に城主、武士、商・職人や町人がほぼ同心円状に住んでいました。二の堀の内側には、寺院や神社はなく、城下町外縁に建てられていました。城下町を守るための配置だと考えられています。二の堀を東に進むと、朝日町通りに出ます。



甲府駅北口・藤村記念館(ふじむらゐねんかん)

北口の玄関口では、
イノキ煙^(い)のかたちをした
「藤村記念館」がお出迎え。



藤村記念館は、明治八(一八七五)年に陸沢村亀沢(現・甲斐市)に建てられた陸沢学校校舎でした。校舎は、県令・藤村紫朗(ふじむらしろう)が勸奨した擬洋風建築の一つです。大工・松木輝殷(まつきてるしげ)が手がけた名作で、漆喰塗りの外壁、アーチ形の窓枠で飾られた窓など手の込んだつくりとなっています。

この校舎は、そのころ、甲府市の武田神社境内に移築復元されました。さらに、平成十二(二〇一〇)年、現在地に再移転され、その姿を後世に残すことになりました。館内では、写真展や音楽会などが開催されています。

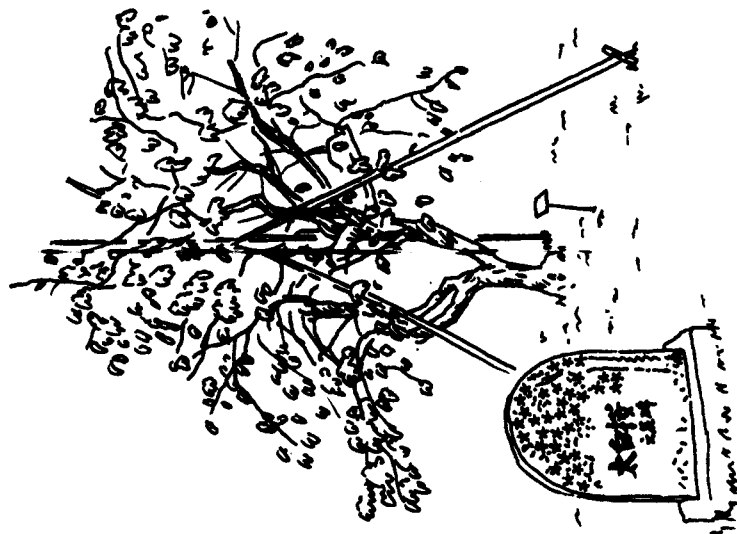
【藤村記念館】

開館時間／午前9時～午後5時

休館日／月曜日(祝日は開館)、祝日の翌日、年末年始

甲府駅北口・山手御門(やまのこゝもん)

山手門の正面の城壁^{（やまのこゝもん）}には、
「鏡石」といわれる畳二畳もある
巨石が組み込まれている。



甲府城は、豊臣秀吉の配下の有力大名が、徳川家康を見張る城として築城されたと考えられています。築城工事と同時に城下町も建設されました。江戸時代、柳沢氏が城主だったころは、城の修築や町の整備が行われ、最盛期を迎えることとなりました。

甲府駅北口の甲府市歴史公園には、山手御門が復元されました。山手御門は、甲府城にあった三つの出入り口の一つです。山手御門とは、山手門と山手渡櫓門(やまのこゝたりやぐらもん)の総称です。山手門は、城門として山手渡櫓門は武器庫としての

役割を果たしていたといわれています。それぞれの門は、発掘された石垣を土台にして千七百年ころの絵図をもとに復元されました。

山手門から入った正面には、「鏡石」といわれる巨石(畳二畳)を配置しています。これは、権威の象徴をあらわしています。山手渡櫓門の中では、発掘調査で出土した瓦や陶磁器などが展示されています。展示室を抜けると、甲府城や富士山を望むことができます。

【山手渡櫓門】

開館時間／午前9時～午後5時

休館日／月曜日(祝日は開館)、祝日の翌日、年末年始

入場無料、公園は随時開放しています。

machi-myu guide book

甲府市朝日町界隈

新婚時代の太宰治と、
坂本龍馬のもう一人の妻
千葉佐那ゆかりの地をめぐる

発行 つなぐNPO
まちミュー友の会

企画・編集 特定非営利活動法人つなぐ(つなぐNPO)
[まちミュー友の会]
〒400-0031 山梨県甲府市丸の内1-1-11
ボレスターズマンションシティ甲府1207号
Tel&Fax 055-228-8633
HP <http://www.2a.biglobe.ne.jp/~yamaiku/>

印刷 ほんほん堂

発行日 2011年8月14日

定価 200円 (税込)

